

はじめに



新潟市潟環境研究所

所長 大熊 孝

【プロフィール】

1942年台北生まれ、千葉育ち、新潟市在住。東京大学工学部土木工学科卒、工学博士、新潟大学名誉教授。著書に、『利根川治水の変遷と水害』、『洪水と治水の河川史』、『川がつくった川・人がつくった川』、『技術にも自治がある－治水技術の伝統と近代－』、『社会的共通資本としての川』（編著）などがある。映画「阿賀に生きる」製作委員会代表。

新潟市潟環境研究所は、2014（平成26）年4月に発足して、早くも3年が過ぎようとしております。調査・研究対象として福島潟・鳥屋野潟・佐潟・上堰潟をはじめ、無謀にも16もの潟群を取り上げています。

発足以来、年次研究成果報告書やニュースレターのほか、記録映像「潟の記憶」やパンフレット「潟MAP」を作成してきました。その成果として、多くの市民から、これらの潟群が、本市の自然の象徴であるとともに、「故郷」のアイデンティティを感じる「場」として、再認識されはじめているように思います。

当研究所の役割は、基本的に「潟」について総合的に調査・研究して、「潟」をどう考えたらいいのかを発信し、実践の方向性を互いに議論するための情報提供をすることだと考えております。

そのためにはまず、それぞれの潟の歴史に目を向けながら、現在置かれている状況をどう認識するのが重要であると考え、多くの市民とかかわりながら、調査・研究してまいりました。

この報告書は、この3年間の活動記録と、潟の変遷・現状を踏まえた、未来への展望について考察したものです。われわれの潟への認識は、「里山」と同じように、人とかかわりの中で潟が保全されてきた「里潟」という位置づけで調査・研究してまいりました。ラムサール条約の基本理念にワイズユース（賢明な利用）という考え方がありますが、「里潟」はまさにそのワイズユースが展開していた場であったと思います。

かつて、無数にあった潟群は、食糧増産のためにその多くが水田化されましたが、今でも16もの潟湖が残り、無数の白鳥やヒシクイ、ヨシキリ、カッコウなど多くの渡り鳥が毎年欠かさず帰ってきてくれ、81万人市民とともにこの時空間を共有しています。この状況はワイズユースを基本理念とするラムサール条約の精神が体现されているといっても過言ではありません。

1996（平成8）年に全国で10番目に登録された佐潟に次いで、近い将来、福島潟や鳥屋野潟がラムサール条約湿地に登録されれば、政令指定都市という大都市で複数のラムサール条約登録湿地を有することになります。このような都市は他になく、新潟市をして「ラムサール条約都市・新潟」といっても過言ではないと思います。「ラムサール条約都市・新潟」を宣言できれば、国際的にも「自然と共生する大都市」として著名になり、多くの外国人が訪ねてくれるところになるのではないかと思います。

最後に、これからも本市の潟群が「賢明な利用」のもと保全され、よりよい環境で市民の宝となることを念願しながら、当研究所の活動を続けてまいりたいと考えています。皆さま方から一層のご指導とお力添えを賜りますよう、お願い申し上げます。

平成29年3月